

身体研究会

研究テーマ

本研究会は、身体を巡る諸理論が哲学や文学、歴史学、社会学等多くの人文科学領域で思索の対象とされている経緯を踏まえ、これら諸理論の学際的な理解および視座の獲得を目的としている。

そもそも、身体は、近年人文科学の領域においてアカデミックな研究テーマとして広く認識されているものの、それ以前においては長い間思索の対象外とされていた。身体は医学等の自然科学の領分であり、人文科学においては心身二元論的な序列を含んだ価値観のもと度外視されてきた。

こうした流れのなか、現今様々な観点から考察の対象とされている身体であるが、その問題意識の在り方は複雑な状況にある。身体を巡っていかなる問題系統があるのか、さらにそれらを把握したうえで論者がいかなる立場で以て身体を語るか、研究者には問われているといえる。

以上のように、身体を巡る諸理論が様々な学問領域で構築されてきた流れを前提としつつ、身体に関わる諸理論の理解を深めることは学際的な思考方法の獲得にも繋がり得るという認識のもと、本研究会は身体を巡る学際的な視座の獲得を研究テーマとするに至った。

活動概要

本研究会は、原則下記文献の講読、ディスカッションおよびそれらを踏まえた研究発表を研究会活動として行った。

講読文献一覧

- ・伊藤亜紗『記憶する体』
- ・荻野美穂『ジェンダー化される身体』
- ・ゲイル・サラモン『身体を引き受ける』
- ・ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』
- ・アンリ・ベルクソン『物質と記憶』
- ・井上雅人『ファッションの哲学』
- ・メルロ＝ポンティ『知覚の哲学』
- ・ジュディス・バトラー『欲望の主体』

今後の展望

今年度の研究会活動を経て申請段階の想定以上の研究成果を得ることができたものの、しかしながら、本研究会の発足が秋学期であったことも関係し研究会の活動自体が3カ月と非常に短期的なものとなってしまった。

そのため、ミシェル・フーコー『監獄の誕生 監視と処罰』をはじめ希望が上ったものの研究会で扱うことができなかった文献があることから、今後の展望としては来年度は春学期に研究会活動支援制度への申請を行い、採択された際には本研究会の活動を継続して行っていきたい。